創傷と哈薩克人の療法

一座哄然たり。以來十餘日、貼藥怠る無きも、創傷更に癒えず。頸部より繃帶に依りて胸邊に吊すの不便言ふべくも非らず。然るに伊犂出發後、一日哈薩克人の教ゆるまゝ、羊脂の一小片を炙りて、其の脂肪沸きつゝ在るを、迅速に創口に附着し、堅く繃帶を施したり。斯の如きもの數回、良藥尚ほ醫し難き創傷も、彼の言に違はず、忽にして癒えたり。何事をも知らざる哈薩克、是に於て大に知ること有りと謂ふべし。予は特に掲げて參考に供す。

沿革

史を按ずるに、伊犂は漢代の烏孫國。初め烏孫王難兜靡、月氏の殺す所と爲るや子、昆莫、新に生れ、傅父希就に抱かれて匈奴に投ず。單于之を養ひ、壯なるに及んで仇を報せんとせり。時に月氏既に西、塞王の地に遷る。昆莫之を追討し月氏遁れて大夏に投ず。昆莫因て此地に留居す。武帝の初め、昆莫十餘子あり、中子太祿最も强、太子早く死するに因り、昆莫其の子岑陬を立てゝ太子としたるが、太祿己れを立てざるを恨み、兵を擁して叛く、昆莫亦兵を分つて岑陬と別居せしかば、國自ら三部と爲る元封中、昆莫、岑陬皆死し、岑陬の子、泥靡立たんとするや、太祿其の成年ならざるの故に、國を以て自己の子翁歸靡に與へ、歸靡死せば泥靡に還すを約す。是に